

## 近代欧米人の中国語語法研究

内田慶市

中国人による中国語の体系的な語法研究は『馬氏文通』（光緒二十四年（一八九八））に始まるといわれる。

もちろん、それ以前に語法研究、あるいは言語研究が全く行われなかつたわけではなく、戦国時代（前5c. - 前3c.）にはすでにその萌芽が見られる。すなわち、墨子、公孫龍、荀子といったいわゆる「名家」「論理学派」といわれる人々の著作の中にそれを見ることができるのである。とりわけ『荀子』の「正名篇」には二〇〇年も前のものとは思われぬほどの優れた認識論にもとづく言語観が示されている。<sup>1)</sup>

漢代に入ると、いわゆる「訓詁学」という学問が生まれ、「先秦文に対して注釈を施す」という形で語法研究が始まることとなる。この伝統が清代まで受け継がれていくわけであり、『馬氏文通』以前の中国人による語法研究の成果をみていく爲には、これらの注釈書の類に目を向けていかなければならないということになる。

ただし、『馬氏文通』以前の語法研究という場合、注意しておかねばならないのは、それは依然としてあくまで

も個別的な研究でしかなかったということである。つまり、ある語に対する意味・用法の記述、あるいはその分類ということに限られていたわけであり、一言でいえば「語の分類」ということになる。そして、彼らは語を「虚字」と「実字」という二つに大別したのであった。

一方、近代の欧米人、特に、明末以降の「西学東漸」の主要な担い手であった「宣教師」たちは早くから布教の相手方の言語を真剣に学習し、その言語現象に目を向け、その言語研究も行ってきた。その理由ならびに利点としては以下のような数点が考えられる。

- (1) 欧米では早くから「言語学」「文法学」が確立していた。
  - (2) 当時の宣教師たちは一方では優れた言語学者でもあり、中国語に通曉していた。
  - (3) 外国人ということから、自分たちの言語と中国語を対照させ、中国語の現象を客観的に捉えることができた。
  - (4) 彼らの布教の範囲は中国全土に及び、「官話」のみならず地方の「方言」も習得する必要があった。
  - (5) 彼らはローマ字を用いて漢字に表音をした。
- (4)と(5)は特に、中国語の「官話」と「方言」の研究にとって有益となる。
- (3)は母国語話者ではごく当たり前の現象でも、外国人の目からすると極めて「特殊」な現象と映り、そのこと

が逆にその言語の「特徴」（それはすなわちその言語の「普遍性」でもある）を浮き上がらせることにもなるのである。

ここでは、特に近代欧米人の中国語語法研究について少しばかり論ずることとする。

## 一 近代欧米人の中国語語法に関する主要な著作

さて、これまで欧米人の中国語語法研究については何群雄二〇〇一を除いては断片的なものに限られてきた<sup>3)</sup>。何二〇〇一についても、主に取りあげられているのはモリソン以来のプロテスタント宣教師たちの著作であり、それ以前のカソリック宣教師たちの著作についてはまだ不十分なように思われる。実は、近代中国語語彙史研究においても同様なのであるが、プロテスタント宣教師とカソリック宣教師の間には継承・発展の関係が存在したはずである<sup>4)</sup>。

以下に『馬氏文通』（二八九八）以前の近代欧米人の主要な語法著作のリストを示しておく。

- (1) Anonymous. *Arte de la lengua Chio Chiu* (稿本、一六二〇)
- (2) Martino Martini (衛匡国). *Grammatica Sinica* [漢語語法] (稿本、一六五三)
- (3) Christian Mantzel. *Clavis Sinicae* (稿本)

- ④ Francisco Varo (葡英國) *Arte de la lengua Mandariná* [如語文書] (Canton, 1703)
- ⑤ Prémare (聖架勝). *Notitia Linguae Sinicae* [樂語正韻] (1720?, 1831 at Malaccae by Morrison)
- ⑥ T.S. Bayer. *Museum Sinicum* [中國雜錄] (1730)
- ⑦ Fourmont. *Linguae Sinarum Mandarinicae Grammatica duplex* [樂語文書] (1742)
- ⑧ Joshua Marshman. *Clavis Sinica* (*Elements of Chinese Grammar*) [中國雜書] (1814)
- ⑨ Robert Morrison (聖架勝). *A Grammar of the Chinese language* [聖臣漢語文法] (1815)
- ⑩ Abel Remusat. *Éléments de la Grammaire Chinoise* [樂文韻錄] (1822)
- ⑪ J.A. Goncalves (公理雅). *Arte China* [樂外文法] (1829)
- ⑫ Gützlaff (舒穆魯). *Notices of Chinese Grammar* (1842)
- ⑬ John A.F. Meadows. *Notices on Chinese Grammar* (1842)
- ⑭ Joseph Edkins (艾羅雅). *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect* (1857)
- ⑮ W.Lobscheid (羅士碧). *Grammar of the Chinese Language* (1864)
- ⑯ T.P. Crawford (德華士). *Mandarin Grammar* [文韻雜如語] (1869)
- ⑰ T.F. Wade (衛太華). 『語體四聲韻』 (1867)
- ⑱ C.W. Mateer (麥華文). 『如語彙編』 (1892)

このほか、S. Julien あるいは Gabelenzs の一連の著作や、ロバート・トームの『意拾唾言』（二八四〇）の序文などもこの中に入れてもいいかも知れない。

これらの著作の間には継承関係が存在している。たとえば、Bayer の著作は Martini の成果を承けているし、Fourmont の著作は Varo や Prémare を参照している。Goncalves のものは、後の Wade などに大きな影響を与えている。ただこの件に関しては別の機会に詳しく論ずることとする。

## 一一 欧米人の中国語語法研究における「虚実論」

ところで、すでに先にも述べたように中国人は古来より、語を「虚実」に分けて説明してきた。

一方、欧米人の語法関係の著作を読むと、以下に示すように、実はこの「虚実論」がそこには受け継がれていることがわかる。

### (1) *Prémare, Notitia Linguae Sinicae* (translated into by Bridgman, Canton, 1847)

*The Chinese language, whether spoken or written, is composed of certain parts. These are called*

Parts of Speech. Each sentence or phrase, to be entire, requires a verb, without which it could have no meaning; and a noun, to designate who is the actor and what is done. It has prepositions, adverb, and also many other particles, which are used rather for perspicuity and embellishment, than because they are absolutely necessary to the sense. The Chinese grammarians divide the characters which constitute the language into two classes, called hu tsz 虚字, and shih tsz 实字, i.e. (literally) vacant or empty and solid characters.

The solid characters are those which are essential to language, and are subdivided into hwoh tsz 活字, and sz tsz 死字, living and dead characters, i.e. verbs and nouns. (27 B)

Premare はこのように語を分類するが、実際のところ何が「虚字」で、何が「実字」であるかは明確には述べていない。ただ、「Article」の類のものを彼は「虚字」と見なしているようである。また、「活字」と「死字」の区別については、『虚字説』の見方を継承していると思われる。『虚字説』では時に「名詞」を「死実字」と呼んでいる。

(2) M.de Guignes (Robert Thom 『鞞罕音韻』 1840)

and must be able to distinguish to a nicely between those the Chinese call 死 size dead, and 活 hwo living; or 實 heu empty, and 實 shih solid.

(3) Morrison. *Grammar of the Chinese Language*. 通用漢語之法 (Serampore, 1815)

The verb is by the Chinese called sang tsee 生字, 'a living word', in contradiction from the Noun, which they call see tsee 死字, 'a dead word'. (113 a)

The verb is also denominatated tung tsee 動字, 'a moving word', and the Noun tsing tsee 靜字, 'a quiescent word'. (113 a)

Morrison の見方も基本的には Premare と同様である。ただ、彼はさらに「動」と「静」の区別に言及している。この「動」と「静」の区別はすでに『説文句讀』の中に見えている。

幾、説文、微、殆也。案微也是靜詞、殆也是動詞、故兩言之。(『説文句讀』)





employed as subordinate words or particles, under the control of certain grammatical laws. We thus obtain the first and most obvious subdivision of words, and it is that commonly used by the Chinese. They call significant words, 實字 shih tsi, full characters, while the auxiliary words or those which are non-significant, they term 虛字 hu tsi, empty characters, particles.

Words may also be viewed as expressive of actions (verbs) and things (nouns). These two kinds of words are called 活字 hwoh tsi, living characters, and 死字 si tsi, dead characters. (88 a)

Edkins の分類もそれまでの見方を継承しているが、彼は更に詳しく「虚字」と「実字」の内容について述べている。

彼は「虚字」の主要な機能を「grammatical purpose」あるいは単語と単語の関係を表わす類のものであり、文の従属的な部分に過ぎないと考えた。すなわち、彼は「文とは実字と虚字がつながって出来るもの」としたのである。これはまさに、『助字辨略』などという「構文之道 不過實字虚字兩端、實字其體骨、而虚字其性情也」というのと同様である。

その他 Marshman も大まかに語を二つに大別し、「substantive」と「particle」に分けている。

このように彼らが「虚実論」で中国語の品詞を考えた理由は恐らくは次の二点である。

一つは彼らが真正面から中国語と向き合ったこと、もう一つは「ポール・ロワイヤル文法」理論である。

彼らは、欧米の語法理論を模倣して中国語語法を記述しようとはしなかった。むしろ、できるだけ中国語の実際の場合に依拠し、中国人の思考方法あるいは中国伝統の言語観によって中国語を描写しようとしたものと考えられる。この方法は「文化の翻訳」における宣教師の文化の伝播と受容の原則に一致する。つまり、彼らが出来る限り中国と中国人に自らを近づけようとした結果なのである。

許國璋一九九一はかつて『馬氏文通』はポール・ロワイヤル文法理論（一般理性文法）の影響を受けていると述べたことがある。しかし、許氏はただ『馬氏文通』が「一般理性文法」よりも優れていることだけを述べ、ポール・ロワイヤル文法の最も重要な点については触れられていない。実はポール・ロワイヤル文法理論の最も肝腎な部分は以下の数段であると思われる。

文法とは話す技法である。話すとは、人間が自分の考えを表わすために発明した記号によって、それを表明することである。(5 p)

哲学者は誰でも、我々の精神に三つの作用があることを説く。すなわち、認識し (concevoir)、判断し (juger)、そして推論する (raisonner) ことである。(34 p)

第三の作用は、第二の作用の延長であるにすぎぬことがわかる。(35 p)

口をきくのは、認識した事物について下す諸々の判断を表現するためである (35 p)

事物に関して我々が下す判断は命題と呼ばれる。例えば、「地球は丸い」*la terre est ronde.* と言う場合である。このようにあらゆる命題は必然的に二つの辞項を包蔵する。一方は主部 (*subject*) と呼ばれ、人が断言する対象であり (例では「地球」*la terre* がこれに当たる)、他方は述部 (*attribut*) と呼ばれ、断言する内容である (例中の「丸い」*ronde*)。さらに、これら二辞項を結ぶ連繫部がある (例中の「*est*」である)。

さて、この二つの辞項は厳密には精神の第一の作用に属することが容易に理解される。これは我々が認識したことがらであり、我々の思考の対象であるからである。また、二辞項の連繫は第二の作用に属することも容易に理解される。それは我々の精神に固有の作用であり、我々の思考の仕方であると言える。(35—36 p)

以上から、人間は自らの精神内で生起することを表わすために記号を必要としているが、また他方、語はごく一般的に次のように区別される必要がある、という結論になる。すなわち、その区別とは、一方は思考の対象を表わし、他方は我々の思考の形態と様式を表わすことである。(36 p)

第一の種類の語は、名詞、冠詞、代名詞、分詞、前置詞そして副詞と呼ばれるものであり、第二の種類の語は、動詞、接続詞そして間投詞である。

ポール・ロワイヤル文法における語の分類は幾つかの問題はあるものの、認識論に基づいて語を二大別したことは時代を画す大きな進歩であった。その優れた点は、チョムスキーのいうように「言語の普遍性を主張した」とか「深層構造の先駆け」ということにあるのではなく、この語の分類法にあるのである。<sup>(6)</sup>

現代の語法学者も一般的に「文は主語と述語からなる (S+P)」と説明するが、ポール・ロワイヤル文法ではそうではない。主語も述語も思考の対象であり、「人の判断を表わす語」と対立するものであると考えた。まさに、時枝誠記のいう「詞(客体的表現)」と「辞(主体的表現)」の対立である。「文は詞と辞から成る」という言語観である。そして、この分類法は中国伝統の「虚実論」と極めて近い位置にあると思われる。

ポール・ロワイヤル文法は一七、八世紀のヨーロッパにおいて一つの規範的文法理論として高く評価され、一八世紀の英語文法にも大きな影響を与えている。Premare 等の欧米人の中国語研究の背景には、このポール・ロワイヤル文法の存在があったはずであり、中国伝統の「虚実論」を受け入れる素地が十分にあったのである。

### 三 Wade の『語言白邇集』の先駆性

さて、欧米人の具体的な語法研究について、Wade (Thomas Francis Wade, 1818-1895) の場合を取りあげて簡単にしておくことにする。

本書は第一版が一八六七年に出版され、その後、第二版が一八八六年に、第三版が一九〇三年に出版され、全三巻からなる一〇〇〇ページを超す大型の中国語テキストである。

この本は漢語史研究の資料として極めて重要なものであり、たとえば、二人称尊称の“您”の最も早期の用例が出現しているし、「北京官話」が「官話」におけるその主要な地位を占めた最初のものでもあった。また、近代日本の中国語教育史においても重要なテキストであつて、明治期に日本人の手になる最初の中国語教科書である『亞細亞言語集―支那官話部』（廣部精編、明治一三年）は、この『語言白邇集』を底本としている。

ここでは、『語言白邇集』第一巻第八章「言語例略」に見える語法論について述べておく。

「言語例略」は全部で十四段（最後の一段は附編）からなるが、第二巻の英訳によつて各段の内容を示しておく。

#### 1 Introductory Observations.

- II The Noun and the Article.
- III The Chinese Numerative Noun.
- IV Number: Singular and Plural.
- V Gender.
- VI Case.
- Ⅶ The Adjective and its Degrees of Comparison.
- Ⅷ The Pronoun.
- XI The Verb as Modified by Mood, Tense, and Voice.
- X The Adverb, of Time, Place, Number, Degree, &c.
- IX The Preposition.
- Ⅷ The Conjunction.
- Ⅷ The Interjection.

Wade は第一段でまず「言語の普遍性」について説明し、次に文をその「神氣」(ムードあるいは表現) character of the expressions) によって平敘文 (directly affirmative of existence or non-existence)、疑問文 (interrogative)、命令文 (imperative)、願望文 (optative)、感歎文 (interjectional) に分類する。

天下各國的話、沒有全不同的地方兒、是人那念頭發出來、隨勢自可分好些神氣、有直說有無、有問、有令、有願望、有驚訝、比方這人死了、那人沒死、那是直說有無的話、那人死了沒有、是問人的話、斬那人罷、是令人話的話、把不得那人好了、是願望的話、可惜了兒那人死了、是驚訝的話。

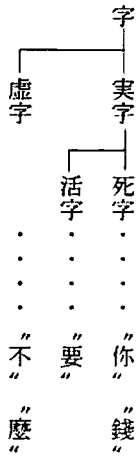
また、漢字の筆画と英語のアルファベットの違いや、中国語には語法書がない（貴國並無這些指定句法的書）などを述べたうえで、語を二つの項目に大きく分類する。

至於那單字、統分虛實兩大項。本字裡有正義的、統謂是實字、其中要看用法、還有死活之分、虛字較難細辨、比方你不要錢麼、那一句、那錢字本無正義、用之竟是因爲指明了、是訂問的口氣、就是虛字、其餘的幾個裡、那個不字雖有實義、漢文裡頭還算虛字、那你字要字錢字、那都爲實字

彼はこのように語を「実字」と「虚字」に分類したうえで、さらに次のように「実字」を「死字」と「活字」に分類している。

至於那個死的活的的不同、就是此處你錢這兩個字是死的、那要一個字是活的、然而那要字纔說是活字、在此

處固然是活的，別處也可以當死的用，比方其要在速這一句，那要字速字，可不是死字麼。つまり、「你不要錢麼」を例にすれば、以下のようになる。



彼のいう「死字」は「名詞」であり、「活字」は「動詞」ということになりそうだが、これは上で述べたようなそれまでの分類を繼承しているものである。

また、「虚実が互いに變通する」こと、また「又は活字を主とする」ことにも言及している。

至於那個死的活的不同，就是此處你錢這兩個字是死的，那要一個字是活的，然而那要字纔說是活字，在此處固然是活的，別處也可以當死的用，比方其要在速這一句，那要字速字，可不是死字麼。看起這個來，就是虛字實字這些個名目，大有隨時隨勢可以互相變通的理。變通是全能夠變通的，甚至於有人說。不論那個字，都可以做半活半死的用。我們英國話文限制死些兒，沒有漢字那變換適活動、權分其大端、有單字、有句法、



那字各歸九項、就是論單字的一端、至於連字成段、那就是句法。

彼のいう「虚字と実字の変通」や「半活半死の用」などは、まさに朱德熙一九八五でいわれているような中國語語法の特徴の一つである。「漢語的靈活性」「漢語詞類跟句法成分之間不存在簡單的——對應關係」あるいは「漢語的名詞動詞、形容詞都是多功能的、不像印歐語那樣一種詞類只跟一種句法成分對應」というものである。

次に彼は、文における「主述」（彼の術語では「綱目」）についても述べている。

就是無論何句、必有綱目部分、方能成句、人家所題那人、那物、那事、爲綱、論綱的是非、有無、動作、承受、這都爲目。

第二段では「名詞」（彼は「名目」と呼ぶ）における「定」（「已準」あるいは「定向」と呼ぶ）と「不定」（「未準」「無定向」と呼ぶ）の問題にも触れている。

英國不作文說話裡、凡有遇用名目、多有先加字樣、可以指出所提是早已是否議及、這等字樣漢話裡雖然沒有詳細分別、凡遇其勢、也有分其已准未准之法、比方凡說有個人來、有一個人來、這兩句聽了、可以知道

所論の人、並不是個早已論及的、那傳話的心裡、還茫茫無定向呢、設若傳話的人說、那個人來了、可以知道來的、是早已提過的那個人、傳話的如此分清界限、那就是確然指明了。

つまり、「有一個人來」と「那個人來」の問題であるが、現代の言語学でいわれる「既知」と「未知」、あるいは「旧情報」と「新情報」ということにすでに気がついているのである。

次の「那個人」の「那」に関する記述も注目すべきことである。「這」との対立で考えずに、英語の「定冠詞」的な用法であるとし、単なる「定」「不定」のみならず、「專指 (specific)」と「汎指 (generic)」の區別にまで及んでいると考えられるものである。

我們這些那字這字、原是分別彼此之用。那可自然、那個且等來再說、就是這第二十二句裡、專用那個人的那字、卻沒有彼此之分、實因指定、不是泛論。

in the phrase *na go jen*, given in paragraph 22, the *na* employed is not that as distinguished from this, [not the denominative pronoun], but serve, in short, to shew that the proposition is not indefinite; [in other words, it is the definite article.] (Key, 105p)

第三段においては「属詞」（「陪伴詞」と呼ぶ）を取りあげている。

話裡凡有提起人是物、可以有上頭加一個同類的名目、是要看形像的用處、做為陪伴的字。

ここで注目に値するのは、次のように、彼がすでに属詞の機能を「個体化」にあると述べていることである。すなわち、「属詞」が付くことによつて「総称 (generic)」から「個体 (specific, particular)」となるということであり、これも彼の語法論の卓越性を示している。

總之細察那陪伴字的實用、像是把總類尊項、分斷辨明的意思、即如天皇之天、后土之土、是有類無項的名目、那兒有陪伴的字樣、至若那些有類可以分項的那宗總名、要每出每類多少項、就把那陪伴字、當作細目為方便、

the true function of the attendant noun is, apparently, to distinguish the generic from the specific. (or the general from the particular). The noun tien, being 'huang tien', Heaven, or t'u, being 'hou t'u, Earth, are general designations incapable of subdivision into minor denominations; they have consequently no attendant nouns associated with them. Where the general designation [applies to what] is capable of

subdivision into parts or items, the attendant noun is of use in numeration, in that it represents the item as distinguished from total. (Key, 106p)

第五段では「格 (case)」を論じている。「主格 (nominative case)」、「賓格 (objective case)」、「所有格 (possessive case)」の三分類である。

那賊匪燒過我老人家的房子這一句裡、按著英語的說法、賊匪是頭等、房子是二等、老人家是三等。

總之那名目、不論甚麼、是行的當爲頭等、受的就當爲二等、歸爲的就當爲三等。

第九段では「Mood」を六つの形に分類する。Indicative mood, Conditional mood, Potential mood, Imperative mood, Infinitive mood, and Particle である。

また「時制」にも触れており、それはいささか印欧語の束縛を受けている感もあるが、ただし、以下のような記述はやはり注目すべきであろう。

有漢人說、馬跑、鳥飛、虫扒、魚游、這幾句話、既是這麼連著所說的必是馬類都是跑的、鳥類都是飛的、

虫類都是扒的、魚類都是游的、這個意思。或是偶爾聽見那旁人說、馬跑那句話、必算他專指有匹馬正在跑著、

還是常說那個馬跑的。

ここで彼は明らかに中国語の名詞における「総類」と「個別」の問題を意識しているようにみえる。つまり、同じ「馬跑」という文でも、ある時は「総類」であり、ある時は「個別」と考えるのである。

#### 四 小 結

このように、Wadeの『語言自邇集』は、語法の専門書ではないにも関わらず、これまで示した内容だけからも語法学の観点から再度詳しく取りあげる価値のあるものであると思われる。

舒志田一九九八でいうように、中国語で書かれた最初の語法書はCrawford(高第丕)の『文學書官話』(二八六九)であるのは事実である。その本によって初めて「名頭」名詞、“替名”人稱代詞、“指名”指代詞、“形容言”形容詞、“數目言”數詞、“分品言”量詞、“加重言”副詞、“靠托言”動詞といった「語法術語」が登場してくるのであり、『語言自邇集』ではこのような具体的な術語もまだ使用されず、不完全なものではある。しかしながら、一方では、『文學書官話』における「名頭(名詞)」の三つのレベル分け(位次)などは『自邇集』の基礎の元に発展させたもののようにも思える。もちろん、『語言自邇集』もそれまでの先人の成果を承けたものであるに違いないが、これらについては今後の課題としておきたい。

〔付記〕本稿は同じ題名でこれまでに、「中国中国語学会創立五〇周年記念大会」(二〇〇〇・一〇・二九、名古屋大学)および「The second conference of the European Association of Chinese Linguistics」(二〇〇一・九・六、ローマ大学)で口頭発表し、拙著『近代における東西言語文化接触の研究』(関西大学出版部、二〇〇一・一〇)にも収録されているが、いずれも修正加筆が加えられており、本稿が最新修訂稿ということになる。

## 注

- (1) 詳しくは拙稿「荀子の言語論」(『敦賀論叢』第一〇号、一九九五)参照。
- (2) 欧文資料を使った官話研究、方言研究には、たとえば、古くは羅常培の研究があるし、近人でも、楊福綿氏や古屋昭弘氏、錢乃榮氏等の一連の成果がある。
- (3) 何氏の他には鳥井克之氏の労作(『中国文法學說史』)があるが、いずれもカソリック宣教師たちの著作に関しては不十分である。
- (4) カソリックとプロテスタントは、たとえば「聖書」などは相手方のものを徹底的に焼き払ったりしたとまでいわれているが、モリソンの『神天聖書』はカソリックのバセのものを底本にしていることは有名な事実であるし、モリソンの著作にはカソリックの宣教師たちが編纂した中国語関係書のリストも多く挙げられている。当然、それらの著作を読んでいるということであって、英華字典編纂に当たってもそれらを参照したことはあつたはずである。
- (5) ポール・ロワイヤル文法の日本語訳は、南館英孝訳によっている。(南館英孝訳 ポール・リーチ編序 C・ラン

- スロー・A・アルノー著 『ポール・ロワイヤル文法』 大修館書店、一九七二
- (6) ポール・ロワイヤル文法の再発見をしたのは、宮下真二である。「ポール・ロワイヤル文法の再発見」(『英語はどう研究されてきたか』季節社、一九八〇)を参照のこと。
- (7) 英訳は『語言自選集』第二卷である「Key」による。
- (8) この「虚実変通」についてはEdkinsも触れている。

参考文献

- 石田幹之助一九三二 『歐人の支那研究』 日本圖書株式会社
- 何群雄二〇〇一 『中国語文法學事始』 三元社
- 一九九七 『馬氏文通』 與天主教教會 『中國語學』 No. 二四四
- 朱德熙一九八五 『語法答問』 商務印書館
- 許國璋一九九一 『馬氏文通』 及其語言哲學 『中國語文』 第三期總第二二二期
- 鳥井克之一九九五 『中国文法學說史』 関西大学出版部
- 舒志田一九九八 『文學書官話』 の成立及び日本への流布 『語文研究』 第八五号
- Summers, James 1863 *A handbook of the Chinese language*, Oxford.
- 宮下真二一九八〇 『英語はどう研究されてきたか』 季節社
- 内田慶市二〇〇一 『近代における東西言語文化接触の研究』 関西大学出版部